

インタビュー 「川村湊」というスタイル

森村, 修 / 川村, 湊

(出版者 / Publisher)

法政大学国際文化学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

異文化 : journal of intercultural communication : ibunka

(巻 / Volume)

18

(開始ページ / Start Page)

87

(終了ページ / End Page)

132

(発行年 / Year)

2017-04-01

特別企画

インタビュー——「川村 湊」というスタイル

川村 湊先生（聞き手） 森村 修先生



川村先生 × 森村先生

森村 ざつくばらんなんだけれども、一応予定としては、川村湊がどんな人かという話から始めて。

川村 こんな人です。

森村 そうそうそう。だから、要するに来歴ね。基本的には、川村さんは法政出身だから、まずその辺のところから、学生として法政に来てからの話と。それと、学生時代は置いておいても、卒業してから韓国へ行ったりとか、その辺の法政の一教に入るまでのまず一つの流れ。それと同時に、文芸評論家として活躍する文壇の話。そこでまず川村さんのいわゆる評論家になるまでと、その近辺と、もう一つのテーマは国際文化に入る前の第一教養部と法政人脈の話で、川村さんだから柄谷「行人」さんの話が一つのポイントで、多分、学部生も教員の中にも余り知らない人もいるし、柄谷さんとの関係も含めて。

川村 柄谷さんが法政にいたということも知らないだろうし、ひょっとしたら柄谷さんも知らない。

森村 知らない。だから、柄谷とは誰、何をしているの。だから、一応柄谷さんをめぐる話で、それはもちろん法政の話もあり、文壇の話もあり。だから、柄谷というキーワード、

キーマンを中心なところと、あと、やっぱり『異文化』ということだから、国際文化学部を立ち上げるときの問題と、いわゆる国際文化ができ上がって、定年でおやめになるという最後のストーリーということで、一応、川村評伝みたいなのを口述していただいたのです。他者が書くよりも本人に語らせるほうが楽なので。一応人物、川村湊というのをコアにした、あと人間関係と、芸芸批評家というのと、大学教授という仕事面ですよね。それと学部関係の話というのを、別にみてのとおり準備もないので、行き当たりばつたりで構わないので。

川村 私は適当にしゃべるので相づちでも打ってください。

森村 そう、相づちを打つと。突っ込むとか。だから、あとはやっぱりさっきいった司修さんとか、尹学準（ユン・ハクジュン）さんとか、**国際文化をめぐる思い出話**。

川村 懐かしき人々ですね。

森村 そうそう。

川村 司修さんのことを懐かしき人なんていつたら怒られるかな。

森村 まだまだ早い。

川村 じゃ、学生時代から始めると、私は、誤解されるんだけども、文学部出身だろうと言われるけれども、**出身は法学部政治学科で、入学は一九七〇年ですから、ちょうど全共闘運動が盛んであり、その年の十一月でしたっけ、十二月でしたっけ、三島由紀夫が市ヶ谷に突っ込んだときに、私は市ヶ谷、ここにいて、おお、ヘリコプターが飛んでいるな、何なんだろうということ、じゃ、行ってみようかと思つて走つていきました。**

森村 みた？

川村 市ヶ谷のほうに走つていたら、新見付橋の道を機動隊が完全に封鎖して行けないということ、それでもちろん三島由紀夫が突っ込んだということで、そのまま友達と一緒に新宿へ流れて行って、そのとき安い飲み屋で、みんなが三島が云々かんぬん、賛成派と反対派と、ばか派とすごい派と、何であんなことをいうんだということをいろんな、老いも若きもやっていたというのはありましたね。そのとき法政大学は全共闘運動が盛んで、基本的にはバリケードストライキ、それに対して学校側のロックアウト。今はなくなっ



川村 先生

ちゃったけど、門のところに鉄柵をつくった。その当方で一億円かかったと。そんな金がかかるんだったら学生に還元せよというふうにいってたけれども、鉄柵をつくった。キャンパス全部をとり囲むように。

○森村 囲っちゃったですよね。

川村 ええ、囲ったわけですよ。あれがなくなったのは、いつでしたっけ。

○森村 あれはいつだったかな。

川村 まあ、十年ぐらいはありましたね。

森村 私が学生のときもありましたからね。

川村 あれはトランプ〔大統領〕のメキシコの壁みたいに関日、二日ではあつとつくっちゃったんですよ。

森村 そんなに突貫工事ですか。

川村 ええ。だつて下手にやっていたら反対派が邪魔しますから。

森村 逆に占拠されちゃうからね。

川村 おもしろいことには、そのときに文学部と経済学部は中核派が支配していたけども、中核派は反対しなかった。なぜならば、外からの攻撃を防げる。

森村 そうそう、防波堤になるんでしょう。

川村 それは何しろ六角校舎で殺人事件があつて、それから、その前に早稲田の革マル派の海老原君を中核派が殺して、その仕返しで攻撃して来ました。ちょうど私はそのときに授業にたまに、めったに出ないのに……。

森村 たまたまいたんですか。

川村 ええ。その教室に革マル派が侵入していたんですよ。

森村 教室の中に？

川村 ええ、そうです。大教室で授業を受けていたら、後ろでみんなわつと急に立ち上がったんですよ。あれっ、何しているんだと思っ

たら、ばつとヘルメットをかぶって、どどどつとおりて行って、今のキャンパスのピロティーの前のところにプレハブで部室があったんですよ、「第二」文化連盟の中の。そこに攻撃しに行ったんですよ。かわいそうに、文連にいたけれども、中核派じゃない、関係ないのがたまたまそこに来ている、それが血祭りに上げられて頭を割られて、白昼倒れたままでした……

森村 内ゲバ？

川村 死にまでは至らなかった。重傷でした。

森村 死にはしなかった。

川村 ええ。みんながみている前でそれをやって、それでピーッと一挙に退却と行って裏門からばあつと逃げていったんです。その後から逃げるな、帰れといって石を投げたのが私で（笑い）。やっている最中はとてもそんなことはできない。

森村 怖いから（笑い）。

川村 もう向こうに行つてから。そういうこともあったから、鉄柵をつくつたのは中核派にとっても助けになった。

森村 まあ、よかつたというか。

川村 革マル派の攻撃から身を守るためですね。

森村 私のようにその十年後、八十一年にもありましたね。

川村 それは余りいわないほうがいいと思うけど、学内にはいろいろなことがありましたということ。特に法学部の場合はそのころ、何しろ黒ヘル軍団だから、武装蜂起準備委員会、プロレタリア軍団というんですよ。みんなにいうと、元新左翼の連中に笑われるんだけど、おまえ何、プロレタリア軍団、武装蜂起準備委員会って（笑い）。太田竜が指導者だったんですよ。家畜解放まで言い出した太田竜が。

森村 ばかの太田竜、そんなこといいのいな。そうなんだ。

川村 そのころ、文学部、経済が中核派で、法学部がプロレタリア軍団で、経営学部は笠井潔たちがいたマル学同だったかな、六二年館のほうは日共民青、みんないたところをすみ分けして、昔の大学院と、あそこは日大全共闘の亡命政権があつたんです。秋田明大も来ていましたね。

森村 そうなんですか。それは知らなかった。

川村 実際私も会っているし、そこに一年生のときにこもっていたから。

森村 そうなんだ。結構学生運動の闘士だったのね。闘士というか、闘士ほどではないか。

川村 武装を放棄したほうです（笑い）。蜂起していない、放棄した。

森村 投げ出したほうね。

川村 放棄して文芸研究会というのに入った。もう一年で、あほらしくなって、デモやストも、危険だし、授業も出ていないし、結局酒を飲んだりとかで、学校へ来るのは誰か金をもっていないかだけで、飯田橋、神楽坂で安く酒を飲めるところを探していたらしく。これも余りいろいろとさしさわりがある。

森村 いろいろ問題があるから、校正の段階で赤を入れてもらって。

川村 それで文芸研究会で富士見坂文学とか法政詩人というのをつくって、専ら文学青年として活動したんですよ。そのころ、結局、文芸研究会というのは割合とサークルとしてはそれなりの活動性もあったんだけど、物書きになったのは私一人ぐらいで、一人だけ先輩にいたのは、ヘタウマ漫画の、椎名誠の専任絵画家ともいえる、沢野ひとしさん。

森村 沢野さんは文芸研究会なの？

川村 文研の先輩だった。私が行ったときはもう卒業していたけれど。

森村 でも、あの人は何学部？

川村 文学部。そのころから童話をやっていて、そのころはたしか、こぐま社という絵本の会社に勤めていて、自分でガリ版刷りで絵本の世界みたいな冊子を出していた。ガリ版がないから、卒業していても文芸研究会へガリ版を貸してくれと来た。私がいつも入り浸っていたら、僕は先輩ですと沢野さんが来た。私がお手伝いをして、たしかあんパンもらったという記憶があるけれども。

森村 それは何年ぐらいのときですか。一、二年？

川村 私が一年のときだから七〇年ですよね。それから先輩、そのころ雑誌の「エロチカ」というのをやっていて、今『短歌往来』という、ながらみ社という短歌のやつをやっている晋樹隆彦という、本名は及川さんなのですけども、短歌のほうでは……

森村 有名な。



森村 先生

川村 ええ、晋樹隆彦という。短歌三三兄弟、「心の花」という、佐佐木信綱系統の結社です。幸綱氏と「絶叫短歌」の福島泰樹氏と晋樹隆彦氏が短歌三兄弟といわれていた。今『短歌往来』という雑誌で、ながらみ書房というところで、短歌の世界では知られている。

森村 それなりの。

川村 ええ。そういう人が一応先輩にはいました。忘れられないのは、詩人の川崎克巳さんと守靖男さんですね。

森村 川村さん、結局四年でちゃんと出られたんだよね。

川村 そうです。そのころ同期だったのが田中優子さん。田中さんは文学部で、そのころから知っていたわけじゃないけれども、文芸研究会に日文の学生もいたから、そのつながりで日文のこともある程度は。家内なんかと知り合ったのも。

森村 そこで？

川村 ええ。日文で、田中優子さんと同期、同級生。

○森村 同級生？ 奥さん？

○川村 ええ。

○森村 そうだったんですか。それは知らなかった。日文で？

○川村 ええ。

○森村 あの当時、日文の先生って誰がいたんですか。

○川村 その頃は益田勝美さん、広末（廣末保）さん。もちろん小田切秀雄さんもいた。

○森村 往年の。

○川村 ええ。それから、松田修さんもいたし、私は二年生のときに勝手に広末さんのゼミに行っていたんです。

森村 そうなんですか。

川村 ええ、日文のゼミで。政治学科だけでも、一、二年のときは経済学部の資本論を読むゼミに、もちろん一年生は入れないけれども、入っていたんですよね。でも、やっぱり『資

本論』は難しいと思つて、それで広末さんのところに行つて聴講させてくれといつたら、まあいいよということで、『世間胸算用』を読んでいて、でも、周りのほうがあまり利口じゃないから、彼らよりも俺のほうが文学に詳しいというふうにたかをくつたところがあつた。そのときは田中優子さんはいなかつたけれども、おやめになつた田中さんと同世代で日文的の先生になつた近世文学の日暮聖さんが同期だつた。

まあ、そういう人はいたんだけど、結局、やっぱりその世代は法政を出ても、何しろ勉強はしていないし、学校内ががたがただから、自分でいうのも変だけれども、ちよつとまともなやつは大学に見切りをつけた。政治学科では石母田正さんのゼミに入ろうとしたけど、落とされた。授業とか大学院には行かないで、どこかよそでやっているとこのは。それで、そのときに、三年、二年のときか、諸田和治さんと自主ゼミをやっていたんですよ。諸田さんが文芸評論家だということで、これは学内でできないから、吉祥寺だつたかな、阿佐ヶ谷だつたかな、諸田さんの家の近くの神社の集会所みたいなのを借りてやりました。

森村 自主ゼミ的に。

川村 ええ、自主ゼミ的にいろんな本を読んだり、あるいは書いたりして、やっぱりガリ版で同人誌をつくつたりして、そういうこともやっていましたね。だから、それが文芸評論の一つの修行みたいにはなつた。だから、法政にはいろんな意味でお世話にはなつたけれども、正規にお世話になつたというよりは別の道ですよね。

森村 個人的な。

川村 ええ。だから、考えてみたら、諸田さんもよく、お金にもならないし、よく学生たちにつき合つてゼミや合宿までやつたんですね。そうなんですか。参加者つて大体何人ぐらいだつたんですか。

川村 結構いましたね。十人ぐらい。

森村 そんなに。

川村 ええ。いろいろ。で、終わった後、酒を飲んでというパターンで、結構、二年、三年。二年間ぐらいは続けたかな。もちろん卒業するまでということですけど。

森村 大体、割合としては週一回ぐらいやつたんですか。ちゃんと。

川村　そうですよ。結構やっていました。

森村　結構、じゃ、週一回ぐらいにコンスタントに二年ぐらい。

川村　隔週ぐらいかな。

森村　でも、二年やって、毎月四、五回はやるわけですよね。

川村　ええ。仲間はフランス好きが多かった。

森村　うん、フランス文学。

川村　そのころ、いわゆるヌーヴォー・ロマンが全盛ですね。

森村　そうか、ヌーヴォー・ロマン、その時代か。

川村　ヌーベル・クリティック、そういうので聞きかじって、最近じゃック・デリダだ、いやミッシェル・フーコーじゃないか、いや、もうそんなのは古いと。アルチュセール、やっぱり構造主義。構造主義四天王とか、ロラン・バルト、フーコー、ラカンとか。

森村　ラカンと、アルチュセールとか、フーコーとか、そうなんですか。

川村　そっちはほうは思想のほうですけどね。

森村　まあ、そうですけどね。じゃ、ロラン・バルトとか。

川村　ええ、文学のほうですね。文芸研究会でもそうなんだけど、結局ビュトールやロヴグリエ、新しいところではル・クレジオ。実際に翻訳を当てる、『バイディア』とか、それで蓮實重彦さんとかがやっていて、みんな。だから、学生の割には、背伸びをやっていったわけですよ。

森村　でも、学部の一、二年生といたら二十そこそこぐらいですよ。

川村　だって一年、二年の先輩がフランス語を勉強して、一生懸命翻訳をやっていた。ヤコブソンとかやっていて、私もわからないなりに、じゃ、俺はナボコフとボルヘスがいいからということ、翻訳は出ていないから、ボルヘスを原書で買ってきた。

森村　スペイン語の？

川村　いや、英語だと思っていた（笑い）。おい、英語の本が入ったぞ、ボルヘスだぞ。考えてみたら原書じゃないなと。

森村 それ自体もスペイン語、あつちのほうですよ。南米だから。

川村 そういう笑い話みたいな失敗もあるけど。そのころ、だから全共闘運動があつて余り授業をまともにやらなかったということで、いろんな形で自主ゼミみたいなのをあちこちでやっていて、だから諸田さんとやっていて、阪上脩さんともやっていました。それ以外にも、いろいろほかでもあつたみたいですね。

森村 やっぱり、そういう。先生も学校に来てても授業が成り立たないから。

川村 やつてくれといつたら、みんな来てくれましたね。しかも、本当に自主ゼミだから、学部とか学科とか関係なしに。そのころは本当に自由な感じです。諸田さん。諸田さんの場合は一教（第一教養部）だったから、そのころ一教と専門学部の違いもわからなかったけれども、あのころ、一教に結局詩人としては清岡卓行さんがいて、宗左近さんがいて、ドイツ語の山本太郎さんがいて、英語の木島始さんがいて、それからロシア語では三木卓さんが来ていて、三木卓さんともやっていました。三木さんとはそんなに長くはやっていかなかったけれども、授業が終わった後、何人かでお茶を飲みながら三木さんから話を聞くということ。あと、全然学外だけど、秋山駿さんとか、そういった人たちを呼んで、自主ゼミの流れみたいなものですよ。だから、そういうので結構、学生時代にしては豊かでしたね。

森村 豊かな人たちで。

川村 ええ。いろんな人たちと話を聞かせてもらったりしたことでは役に立ちましたね。その中の一人が柄谷さんです。

森村 柄谷さんはもう既に来ていた？ まだ？

川村 いや、来ていましたよ。私が一年のときからもういたんじゃないかな。

森村 七〇年ぐらいから。

川村 ええ、いましたよ。評判というか話題になって、すごい教師がいる、柄谷行人というのがいるというので、ちょうど『意味という病』が出た頃、最初に『畏怖する人間』が出て、二番目の本ですね。

森村 六九年ぐらいでしたっけね。

川村 ええ。それで評判になって、『畏怖する人間』に書いたのがまだ『文藝』とか雑誌に載ってた頃です。「意味という病 マクベス論」

を雑誌で読んだ覚えがあるから。このときの同級生が、柄谷行人というのがいて、すごく冴えていると。どうも女子学生にもえらい人気があると。じゃ、行ってみようか、見に行こうかと。こっちも冷やかしのつもりで、柄谷は何者ぞと思つて授業を見に行った。

そのころに、英語の先生だったわけだけでも、クラス授業ですよ。だから、基本的には入れないわけですよ。ところが、私が二年か三年ぐらいのときに総合講座というのが始まった。つまり総合講座にあいているものには、ほかの学部というか、クラス授業の学生でなくても入れるということだった。それで入ったんですよ。もちろん英語を主にしているんだけど、最初にエドワード・ホールの『かくれた次元』を読んだ。もつともあれはちゃんと翻訳が出ていたけど。

森村 まあね。みずす書房から出ているけどね。

川村 あとエリック・ホッファーなんかも読んだかな。『かくれた次元』のことは覚えているんだけど、それを原文で読ませて、来たやつに訳せよという授業だったんだけど、こちらのほうはできもしないし、何もしないで、適当なことをいつて、なるべく当たらないように。でも、当たらないようにしていると、これは教師をやつて初めてわかつたけど、当たらないようにしているやつはよく目立つ。うろろろして、隠れそうにしたがるやつというのは一番目立つ（笑い）。そのときに仲間と一緒に『法政評論』という雑誌を出すと。これは（第一）文化連盟が出すということになって、予算をもちつたんですよ。これ、一号は変なことでもつづれちゃうんだけど、つづれるというか、出したことは出したんだけど、配れなかつたんだけど。それは犬の死骸の写真を載せたら、部落解放のほうからクレームがついた。その人たちがじゃなくて、それを代弁するような人たちがぎゃあぎゃあいつて、結局お蔵入りになった。そのときに柄谷さんに、「自作の変更について」という短い原稿だったんだけど書いてもちつた。

森村 何かありましたね。

川村 あれは『法政評論』が初出です。

森村 あれは『法政評論』だったのか。初出。

川村 それを私が原稿をもらいに行つて、原稿をもらつて、ちゃんと手書きの原稿で、あの原稿どうしたかな、自筆原稿があるけども、そのうち古本屋に売ろうかな（笑い）。

森村 希少性が。

川村 もちろん授業は出だし、そういうのもあって柄谷さんとも知り合ったという。

ちよつと話は飛ぶけれども、私が『群像』の新人賞の評論部門で受賞したときに、もちろん授賞式に行つて、たしかあのときは新橋の第一ホテルでやつていたんですけども、そこに柄谷さんがおくれてやつて来て、そして、ひな壇にいる私をみて、何だおまえかということになった。

森村 じゃ、向こうも顔はちゃんと。

川村 ええ、顔は覚えていて、卒業してから結構たつてましたけれども。

森村 『群像』新人賞は何年にとりましたっけ。

川村 あれは八〇年ぐらい、七九年だったかな。

森村 そのぐらいですよ。八〇年にはなつていないけど。

川村 ええ。だから四、五年ぐらい。その間、私が卒業してから就職というか、新聞でみて、大中というダイエー系列の中国美術を売るお店というのを六本木に開くという広告があった。中国の美術が好きなのという何か変な募集だったので、そのころは中国には行けなかつたんですよ。友好商社じゃなければ中国に入れなかつた。だから友好商社に勤めたら中国へ行けるだろうという意味もあつて、大中というのに入った。

森村 ダイチュウですか。

川村 ええ。大きな中。ダイエーと中国をあわせて大中。最初六本木店で勤めに行つて、転勤して大阪の京橋店へ行つて、うろろろしていた。

森村 何で大中に志望したの。理由としてはそれだけ？

川村 まあ楽そうだから（笑い）。

森村 でも、そこではちゃんと、物書きじゃなくて、普通に商社マンじゃないけど。

川村 営業ですね。店でいらつしやいませといつて、こちらの掛け軸は、こちらの七宝はお買い得ですと、やっていた。

森村 二十三、四でその仕事を。

川村 ええ、そうですね。結構偉い人とか有名な人がお客さんとして来たんですよ。

森村 中国の美術品を買いに。

川村 ええ。コシノジュンコ姉妹とか。

森村 そうなんですか。まあ六本木だしね。

川村 私のお得意さんというほどでもないけど。

森村 結局大中は何年ぐらいたんですか。

川村 二年。その後、神戸三宮にあったマルシェという子会社に行ったから三年いましたね。

森村 大中という系列というか。

川村 ええやはりダイエーの子会社です。

森村 その間も評論とか。

川村 ええ。だから、学生時代は詩を書きっていて、児童文学も少しやっていたんですけれども。

森村 そうなんですか。それは初耳。

川村 それが、生きていてというのはおかしいけど、今、坪田讓治文学賞の選考委員をやっているのは、一応、児童文学にも関心がある。

森村 造詣が深いと。

川村 深くはないけど、やったことがあるということですね。

森村 経験者として。

川村 ええ、法政の中で『泣き虫』という同人誌をつくってやっていて、そのときには、それこそファンタジーが全盛で、トールキンの『指輪物語』とか『ホビットの冒険』もはやりになる前にもう既に読んでいましたし、C・S・ルイスの『ナルニア国物語』も。

森村 ルイスとか、ちよつとはやっていましたよね。はやるのはその後かなかったです。

川村 その後なんですよ。だから、『指輪物語』っておもしろいから、『ホビットの冒険』とか、あれをアニメにしてやったら、すごくいいんじゃないかと。実際に私の後輩で東京エージェンシーに勤めていたやつがいたんですけど、そいつと話をして、トールキンをアニメにしたらどうだろうか、ちよつとおまえ企画してみろといつて、やったことがあるんです。

森村 アニメ化。

川村 ええ。版權とれませんでしたけどね。

森村 でも、その試みはもうチャレンジしていた。

川村 ええ。だから、そのころは我々の中ではツールキンとか、そういうのはもう常識の範囲でした。

森村 知る人ぞ知るだけ。

川村 ボルヘスとかナボコフとか。

森村 傾向が違い過ぎるような気もするけど。

川村 だから、あのころ、イギリスファンタジーが非常に岩波書店とか評論社から出てき始めたころなんです。

森村 一九七四、一九七五年。

川村 七〇年の中頃かな。

森村 一九七三、一九七四年くらいですかね。

川村 だから、私は『ナルニア国物語』なんかも翻訳——ジョージ・マクドナルドとか、ウィリアム・モリスとか古いのも。それらはまだ翻訳は出ていないものもあったので、これならいけるだろう、これくらいだったら読めるだろうと思って英語版を買って、やっぱりだめだったけど（笑い）。

森村 俺なんか川村さんの十歳下だから、七〇年代頭は中学生ですもんね。

川村 そのころ我々の中ですごくはやってたのがイタロ・カルヴィーノ、ディーノ・ブッツァーティとアレクサンドル・グリーンで、アレクサンドル・グリーンを、『法政評論』という雑誌で翻訳を載せようということで、あのとき、アレクサンドル・グリーンの上を駆ける女』というのが晶文社から出ていたんですよね。それを読んで、すごくいいと。じゃ、これを読みたいというふうに、それ以外に出ていたのは、『深紅の帆』というのが、アレクサンドル・グリーンで、それしか出ていなかったんですよね。

森村 でも、グリーンってその後ずっと全集みたいのが出ましたよね。全集だっけ。

川村 グリーンというのは何人もいるから。グレーム・グリーンとか、ジュリアン・グリーンとかいるけど、アレクサンドル・グリーン

はロシア。それで、ロシア語をやっているやつに、おまえ、アレクサンドル・グリーンの短編を訳してみないかということで、そのときに、ロシア語の先生にくっついて彼らが訳した。その先生が吉田衆一さん。

森村 えっ、そうなの。吉田さんも一教にいたんですか。

川村 一教にいた。ロシア語の先生だった。で、ロシア語を受けて、私たちは受けていないけれども、諸田ゼミの自主ゼミのときに、吉田さんのところにいたのも、一応ロシア語をかじっていると。そうしたら、アレクサンドル・グリーンというのはおもしろいから訳してみても。本がないと。しようがないから、私が東京外大行って、もっているというのは原卓也さんだった。どうやって調べたのか私もよく覚えていないんだけど、原卓也さんに借りに行っただけですよ。

森村 わざわざ学生が。誰かに紹介されたんですか。そういうわけじゃない、自分で訪ねていった。

川村 貸してくださいといって、また貸すほうも貸す方ですけど。

森村 貸すほうも貸すほうだけど、借りに行くほうも行くほうだよ。他大学まで。

川村 今思えば。しかもロシア語の原書をよく貸してくれたものですね。

森村 読めないのに。

川村 そのときに教授控室に江川卓さんがいて、江川さんと、この学生たち、アレクサンドル・グリーン読みたいんだって、よくそんなものみつけてきたよな、どこで見つけてきたと。翻訳が出ていますからと。

森村 それでおもしろいと。

川村 ということで、じゃ、貸してやるよということでも貸してもらって、その中で『川を上って一〇〇マイル』というのを吉田さんの指導のもとで翻訳して——違う、『川を上って一〇〇マイル』がいいというふうに原卓也さんにいわれたけど、ちよつとこれは長過ぎるので、『デューク船長』というのを翻訳して、その日本語を私が一生懸命直したんだけど、でも全然だめだった。これも余りいっちゃいけないけど、吉田さんは文学的な感覚はあまりない……。

森村 センスはちよつと。

川村 それがないから、正確な訳なんであろうけど（笑い）。

森村 文学じゃない（笑い）。

川村 というふうには思いましたね。それは卒業してからだけど、だから、私が働いているときに吉田さんとか田嶋陽子さんなんかと一緒に酒飲んだりしたことはあります。そのときに彼、彼女らが一教の若手の先生だったわけ。

森村 そうだよな。その人たちもまだ若かったんだよね。それはそうか。四十年も前だからね。

川村 それで、その後、アレクサンドル・グリーンについては沼野充義さんに、早稲田文学の編集者を通じてかな、だからその前に会ったことがあるんですよ。そうしたら、僕はあしたから、ハーバードに留学に行くんだよと。その前に会ってくれて、アレクサンドル・グリーンはいいね、みたいな話をした覚えがありますね。

だから、そのころは、こういうふうになると何か私が一生懸命活動的というふうに思つかもしれないけれども、半分ぐらいそうかもしれないけど、そういう雰囲気でもあったということですね。つまり、文壇的な意味でいっても、詩を書いている連中というのは、あちこちにいろいろ詩のグループがあつて、それが、『ユリイカ』とか『現代詩手帖』もあつたけれども、新人の連中なわけですよ。一応大学ごとに、中央とか、明治とか、法政とか、そういうところで同人誌がやたらめったにたくさん出ていて、みんな、いいところは活版でやっているし、ガリ版で自費出版みたいなのをやって。だから、そのころ紫陽社という会社をつくって、本が出したのが、檸檬屋というところから荒川洋治が『水駅』。直接の関係は全くなかったけれども、知っているわけですよ。そういうのをやったんだということ、荒川洋治とか、平出隆とか、そのころのある意味ではスターだったんですよ。『凶区』も出ていたし、『白鯨』とか『潮騒』というのもあつた。

森村 そうですよ。詩自体が格好いい。

川村 それがしばらく続いた。あのころは天沢退二郎とか、入沢康夫とか、吉増剛造、それから鈴木志郎康、そういった人たちが『現代詩手帖』や『ユリイカ』を中心に華々しくやっていた。それこそさっきの法政の清岡さんとか、宗左近さんとか、鮎川信夫とか、吉本隆明とか、もちろん彼らも活躍していた。

森村 やっていたけど、やっぱり……

川村 やっぱり思潮社の『現代詩文庫』が大きかったんだよね。あれの第一冊目がたしか鮎川信夫。二冊目、鮎川信夫以下ずっと出てい

たんですね。私は高校生のときだけど、あれで、そうか、日本にも現代詩というのがあったと。北原白秋、萩原朔太郎、三好清治で終わっているかと思つたら、そうではなかったんだと。

森村 だから、『現代詩手帖』は、私は余りぱつとしなかったけど、やっぱり友人たちはよく読んでいましたよね。

川村 やっぱ『現代詩文庫』は大きかったですね。安かったし。

森村 ビニール張りになっているやつですよ。

川村 ええ。あそこにいる人が法政に入ってみたら、みんないるんだということ、ある意味びっくりしましたよね。だから、私が最初に入つて、英語の時間で行つたときに、何とかという先生のところで英語を教わっていたんですね。私は別の名前がありますと、その人がいつた。中桐雅夫と書いた。へえ、詩人の中桐雅夫なんだと思つてクラスを見渡しても、誰も中桐雅夫に反応はしていない。知っているのは、自分だけかと思つた。そのときも別に中桐さんの詩をきちんと読んでいたわけじゃないけど。

森村 名前ぐらいは。

川村 うん。だから、詩文庫にも中桐雅夫も入っていたから。本名は白神鉦一。

森村 何か聞いたことがあるぞ。

川村 筆名が中桐雅夫。その後、私が一応文壇で物を書くようになって、新宿のバーに行くと、何か酔っ払いのおやじがいつもいるなど思つたら、この中桐雅夫であつたり、渋沢孝輔であつたり、そういう人たちがうろろしていたと。詩人はみんな酔っ払いなんだと思つていましたね。

森村 それはわからないけど(笑い)。でも、そういう大学の先生方は、皆さんそういうところの人たちだったんだ。そういうところというか、変だけど、雰囲気として。

川村 あれは宗左近さんがフランス語としてやってきて、結局詩人とか物書きは食えないから、大学の先生をやるうと。まあ、教養部の語学だつたら何とかかなと(笑い)。

森村 まあね。だつて今と違うから。

川村 詩人たちだつてできるだろうということ、もちろんドイツ語の山本太郎、英語の木島始、フランス語の清岡卓行、宗左近という

人たちがみんな入ってきて、評論家としては柄谷行人、諸田和治というような人が入ってきたわけですよ。また、スペイン語では鼓直さん、高見克一さんもいましたね。

森村 誰だっけ、『百年の孤独』は。

川村 ガルシア＝マルケス。

森村 マルケスが出るのは八〇年代頭ぐらいですから、その前に当然いたはずですよ。

川村 ええ。ラテンアメリカ文学も私が学生時代に、それこそマルケスとか、カルペンティエルだということで、さっきいったボルヘスに続くラテンアメリカ文学の巨匠たち。

森村 続くような。

川村 最初はボルヘスだったですけど、そのボルヘスがまだ集英社の世界文学全集で、篠田一士さんが、『伝奇集』を訳した。あれは英語からの重訳ですけども、それを出したところで、その後、鼓さんとかがスペイン語からきちんと訳した。

森村 スペイン語から直訳でね。

川村 ええ。ボルヘスはそんなに訳していなかったけれども。

森村 そうですよ。だから、あれどこでしたっけ、マルケスとか、ラテンアメリカの文学の全集みたいなのが出ましたよね。

川村 あれは集英社。世界文学全集を出して、ボルヘスの巻なんか結構いけたので、これはいけるぞということで、国書刊行会から鼓さんが編集してラテンアメリカ叢書を出して、その後、集英社からラテンアメリカ文学を出した。

森村 ラテンアメリカ文学の全集でしたよね。

川村 ええ、完全にそうだったんですよ。

森村 だから、プイグの『蜘蛛女のキス』とか、いろいろ出ましたよね。コルタサルの『石蹴り遊び』とか。

川村 三十年も四十年もたっているんだから当たり前だけれども、そのころ、ボルヘスといっても知られていなかったし、マルケスだって、えっ、マルコスかと（笑い）。

森村 そうね、ベトナム戦争時代だ。

川村 そういうぐらいですよ。ラテンアメリカというようになって。だから、やっぱりまだ主流はフランス文学とかだったし、一番新しいのがソレルスだ、ル・クレジオだといっていたところですからね。

森村 でも、そういうのが先生方にいたのは面白いですよ。私も山本太郎さんにドイツ語を授業で習っている。宗左近さんはちようど多摩に移転するときに向こうに行っちゃったんで、結局、宗左近さんは一年生のときはいたけど、四年生、卒業するときにはあっち側に行っちゃったので。

川村 結局そのころ、別にそういうグループとか何かをつくっているわけじゃないけど、そういった語学で詩人たちが多かったというのが多摩に移ることによってなくなっちゃったんですよ。やっぱり市ヶ谷だということがまた一つ……

森村 ポイントだったんですね。

川村 ええ、よかったんでしょね。

森村 だから、移転のときに一部の人たちは阻止闘争をやったけれども、そういう先生方はどっち派なのかよくわからなかったから。

川村 まあ本人たちもよくわからなかった(笑い)。結局それは国際文化をつくるときのあれにもなるんだけど、結局教養部の、だから、あれは第一次解体みたいなものなんですよ。

森村 要するに分断させちゃうみたいなの。

川村 ええ。つまり、市ヶ谷と八王子、多摩だったときに、結局、教養部は、市ヶ谷に残った一教と、それから、宗さんみたいに経済社会学部として向こうに行った人たち、これは第一次解体なんですね。今から思うと第一次解体だったのね。それで、はっきりいうと、教養部がゼミとか、就職の心配とか、それを面倒みなくていいから、自分たちの好きなことをやっていて楽だということ。だからこそ自主ゼミみたいなこともできた。実際に大学の教師になってみたら、なかなか自主ゼミなんかできないですけど、やりたくもないし(笑い)。だから、考えてみたら、そのころ、もちろん日文とか哲学とか、いろんな先生たちもいたけども、自主ゼミはそんなにやっていないはずですよ。矢内原伊作さんがやっていたとかって……

森村 聞かない聞かない。

川村 でも、それはあくまでも教養部の。もともとゼミをもっていないから、ある意味じゃ、やれた人ですよ。

森村 やれたし、より自由にできたのかも。

川村 ええ。制度というシステムというのは結構大きいけども、やっぱり自由があったほうが。

森村 やっぱいいですよ。

川村 制度的に、システムのやつたら。結局、多摩移転というのは、つまり教養部の先生が学部には張りついてたわけですよ。それは必ずしもそういう意味での、よかったのかということになると、別の考え方もありますね。

森村 そうですよ。だから、向こうに行っちゃったら、結局、学部の英語の先生だとか、学部のフランス語の先生になっちゃうじゃないですか。

川村 それで、原則としては平等にやるということでもゼミをもつということ、やりたくないようなやつに無理やりやらせる。

森村 ゼミを（笑い）。

川村 今、多分、藤沢周さんが悩んでいると思うけど、実際に経済学部や社会学部で……

森村 文学……

川村 社会ならまだしも経済ですよ。

森村 マルクス経済で詩を詠むというのはあり得ない。いっちゃ悪いか（笑い）。藤沢さんも経済学部でしたっけ。

川村 ええ。だから、はつきりいうと、そこでゼミをもたされること自体が大変でしょうね。

森村 苦痛では。

川村 ええ、やっぱりちょっとつらいんだろうなと思いますよね。

森村 経済学部の落ちこぼれといっちゃ失礼か、文学好きというのでもないだろうけど。

川村 昔はだから、市ヶ谷にいたときは経済学部と法学部が看板学部だった。正直に言うと、私は法学部は正規で合格したけど経済学部は補欠合格だった。それで法学部に入ったんです。

森村 そうですよ。ここにいたって、みんな。そっだよ。うちのサークルも経済学部の先輩とかいたけど、普通に映画とか結構うんちくがあったし。

川村 ええ。だから、文芸研究会でも経済学部もいたし、やっぱり離れてしまってもうそういうことができなくなりますよね。

森村 もう全然だめなんです。

川村 経済学部の学生だけで、多摩のほうで文芸研究会みたいなのをつくるかということになると、それは無理ですよ。

森村 無理無理。だから、ちょうど八四年、私が四年生のときに完全移転して、結局サークルとかみんな分断されたから、向こうのやつがこっちに来たり、こっちのやつが向こうに行くって、やっぱりさすがに遠いじゃないですか。

川村 余りにも距離がある。

森村 週一回会うのですら面倒くさくなってから、やっぱり独立していこうねという形になっちゃうか、もしくは全く別組織になりますね。

川村 ええ。学生のサークルとかというのもまたちょっと意味合いが違ってきますよね。こんな調子でいったら、いつまでたっても現在にたどり着かない（笑い）。

森村 まだ四十年前か、七〇年代が突破しないので。

川村 私が卒業して一応仕事をして、そのころも一応文学みたいなことをやりたいと、それはもちろん思っていて、ただ、それをどういうふうに、本当に物書きとして、職業としてやっていくという。もちろんそうなりたいなという気持ちはあったけども、書くものもそもそも詩だったり、児童文学だったり、評論だったりするから、余り小説家みたいに、それで金を稼いで云々というものではなくて、仕事しながら、もつと楽な時間のとれるような。もちろん家内と結婚して子供も生まれたし、それで、少なくとも何かやらなきゃいけないということで、『群像』で評論ですつと募集して、柄谷さんも前に受賞しているし、評論家は『群像』の評論部門から出てくるといのがあったので、応募しようと思って。そのときに水産社という水産業界の業界誌の編集に勤めていたんだけど。

森村 大中をやめた後？

川村 ええ。それをやっているうちに、築地まで行ってタコやイカの相場は幾らですかと聞いていたりしたんです。そんなことをしていてもしょうがないし、いつも築地まで行ってきますと会社にはうそをいって。うそじゃない、築地も行って、築地の市場には行かないで図書館に行って、それで夕方、ああ疲れたといって、築地まで行ってきたから、地下鉄で二四〇円だから往復で五〇〇円ください

いと。それで五〇〇〇円をもらって、近所の立ち飲み屋で一杯二〇〇〇円の Copp 酒を二杯飲んで帰ってきたという。それで『徒然草』論を書いて。

森村 そうかそうか、『徒然草』でしたっけ。

川村 その前は本当は梅崎春生論を書いていたんですけれども、梅崎春生論はなかなかできなくて、一年がだめ、二年目もこれはちょっとでき上がらないと。前に同人誌に『徒然草』のことを書いたから、じゃ、それを何とかしよう……

森村 書き加えて。

川村 ということをやったんですね。これは締め切りに遅れたんです。

森村 そうなんですか。それでも受理してもらえたんですか。

川村 一週間ぐらい遅れた。そうしたら、これも……

森村 読むに値する？

川村 いやいや、つまり編集部に届いたのが遅れた。その前にもう下読みに出しちゃった。応募作というのはみんな下読みに出す。

森村 ある程度チェックがされて。

川村 ええ。まだ売れていない小説家とか評論家、その卵とか、私も下読みをその後よくやったらけれども、もうばらしたから、しょうがないから、編集長が読んだ。

森村 逆に。

川村 ええ。編集長が読んでくれた。

森村 それでひっかかったの。

川村 それで橋中雄二さんという当時の編集長が読んで、おお、いけるじゃないかと。そのまま。

森村 そういうきっかけなんです。

川村 ええ。だから、下読みを通していません。

森村 逆に下読みを通していたら落ちていたかもしれない。わからないけど。

川村 落ちていたというよりは、何考えているんだ、『群像』の文芸評論で、古典論というのは空前絶後だから。

森村 『徒然草』が。

川村 ええ。その後はもう哲学でもある程度受けるように、池田雄一君なんかみたいになっただけでも、やっぱりそれはまでは普通というか、柄谷さんだつて夏目漱石を書いて、そのほうでやっていて、それが当たり前で、その前にモンテーニュのことを書いたのがなつたことがあつたかな。でも、日本の古典はなかつた。

森村 でも、少なくとも古典評論はないですね。

川村 それは編集長が読んで、第一段階パスしたから有利ではあつた。

森村 編集長が読んで載せたら、やっぱりほかの人たちもなるべくちよつとは。何度もだめといつたら。

川村 盾突くわけにもいかないし。私は下読みを何度もしていたからわかるけども、やはりいい悪いというよりも、時代や風潮のことを考えていないとだめですね。全盛期のものとか、えっ、何これとか、はやりのものとかというのは、反発ももちろんあるし、自分の知らないものをはつきりいうと、だめという。

森村 まあ、読んでみわからない。

川村 もちろんちゃんと読むことは読むけれども、だから、誰に当たるかによつてかなり違うはずですよ。だから、そういう意味では運がよかつた。ただ、×切に遅れりや、みんなそうしてくれるわけではないですが……

森村 そりゃ、そうだよ。それはよくいつておかないと。

川村 だから、後から橋中さんという編集長に感謝しています。今、橋中さんは木山捷平賞というのを岡山県笠岡市というところでやっていて、そういうのに最初に選考委員として起用してくれたわけです。秋山駿さんと三浦哲郎さんと私が木山捷平賞の選考委員で。それは編集長だつた橋中さんがお膳立てした。その後、彼は『群像』編集長をやめて、講談社文芸文庫をつくつたんです。

森村 その創設の人？ 創設というか。

川村 ええ、創設者。だから、文芸文庫の初期の坂口安吾の解説なんか全部私が書いた。そういう意味で、使つてくれたわけで、編集者との出会いというのが非常に重要だということがあるし、そういうふうに分がみつけたんだと思つて大事にしてくれる。これも後

づけですけども、自分が見つけたんだというのがやっぱり橋中さんのほうにもあって、だから、結構ひいきにしてくれた。中上健次と担当編集者のように昔の俺を知っているということで、中上健次がその編集者を殴ったとかいう話がある。

森村 実際殴ったんですか、あれ。

川村 ええ、実際にそうですね。

森村 あれ誰でしたっけ。『海燕』の人じゃなくて？

川村 いや、文芸の時の寺田博さん。だって、こんなものはだめだよみたいに、書き直しなさいとかいわれて、済みません、書き直しますと。そういうふうに行ったかどうかわからないけど、意識的にはやっぱり編集者のほうが偉くて、こちらは恐る恐る原稿をもつていって、読んでいる最中に顔をしかめたりすると、あれっ、だめなのかな、どの辺を読んでいるのかなど。やっぱりそういうふう。それで、いいふうにやってくれた人はいいいけども、やっぱり結構厳しい人だっているわけですよ。全然合わない人も当然いるし。だから、中上さんはやっぱり鼻っ柱が強過ぎたというか、それもあるから、逆に初期のころに知っているやつは気に入らない……

森村 自分をいじめる？

川村 俺の惨めなところを知っている。というふうなこともあるんじゃないかなと思う。

森村 ちよつと推測でね。

川村 でも、みんなそうですよ。柄谷さんだって、最初いろいろ書き直したり、今じゃ信じられないぐらいに書き直せといわれた時もある。

森村 そうなんですか。

川村 実は柄谷さんが頼まれて書いたんだと。そうしたら編集者が原稿をなくしちゃった。で、どうしたか。この前のはちよつと余りよくなかったな、もう一度書き直してみてくれと。元の原稿はもう捨てて、書き直してくれと。それで新しいのを書いてきた。実は本当はなくした。

森村 ひどいな(笑い)。

川村 私だってありましたよ。原稿を出したら、締め切りを過ぎてから、原稿をくださいといってきた。原稿はどうしたんだと、送ったじゃないですかといったら、余り早いからどこかにいっちゃった(笑い)。

森村 ずさんな管理で。

川村 しようがないから、もう一回書きましたよ。

森村 パソコンがない時代だもんね。

川村 それは短いものだったから、一応頭の中に残っているのもあって。

森村 ある程度。でも、全文書き直させられたんですか。書き直した、柄谷さん。

川村 そうです。もし今だったら絶対にしないでしようけど。

森村 絶対どころか、殺されますよ（笑い）。

川村 と思うけども、そのころはしおらしく、そうか、だめだったのかと。それで新しいのを書いてきた。

森村 編集者と作家、評論家の間にもいろいろあるんだね。

川村 もちろんそうですよ。そういう話は幾らでもあるけれども、やっぱり最初の力関係と、だんだん力関係が……

森村 逆転してきて、原稿を頼む人になってきちゃうから。

川村 ぜひとも原稿をいただきたいというふうに。評論家はほとんどそういうふうにはならないけれど。

森村 まあ作家だったらね。

川村 でも、小説家は本当にそうなって、だから、意地悪なやつは、しつこく覚えているやつは、おまえ、あのときこんなことをいったとか、

根にもつ。

森村 そうか、おまえじゃ書かないと。

川村 私のところにも、『図書新聞』にいたから、藤沢周さんが原稿をとりに来たんですよ。小説を書くなんて思っていなかったから、原稿をとりに来る、まじめな人だなと思ったら、実は彼はそんなにまじめじゃないんだと後で聞いたけど。結構まじめそうに見える（笑い）。

森村 みえるけど、みえるだけ（笑い）。

川村 という話を聞いてから、小説を書いたと聞いた。ああ、よかったと思った。まじめ一本のやつが書いていたら、どうせろくでもない、

おもしろくないだろうけど、あまりまじめじゃない話を聞いていたから、それなら、いけるかもしれない（笑い）。

森村 どんな評価だ（笑い）。

川村 それで最初の『ゾーンを左に曲がれ』というのが、何かすごかった。何これ、と思われるような。だから、編集者時代とは全然違った感じがした。

重松清君も『早稲田文学』をやっていて、わざわざ我孫子まで原稿をとりに来てくれて。それで駅前でコーヒーなんか飲んだ覚えがあるけども。

森村 重松さんって編集者だったんですか。どこの。

川村 『早稲田文学』。だからお手伝いみたいなもの。お手伝いでもないな、一応編集部にちゃんとして、原稿とりをやっていたんですよ。だから、ただ原稿をとりに来る重松君というイメージがある。

森村 という程度の認識で、そのまま作家になるとは思わなかった。

川村 まあ、そのままではなくて、かなり苦労した。何年も何年もライターをやりながら、たくさん書いていたんですよ。だから、彼のポルノ小説なんていうのがあるらしくて、今書いているのは、まじめというわけでもないけど、いろんな覆面ライターをやったりしていたらしい。

森村 じゃ、苦労人なんですね。

川村 ええ。もうそれを十年近くやっていたんじゃないかな。やっぱり新宿に行って、久しぶりに重松氏に会って、ああ、重松君といったらあつ、川村さんと（笑い）。やっぱり急にそのころに戻るものだね。今度は戻ってしまつて。

森村 作家と評論家の関係じゃなくなって、昔の編集者と。

川村 物書きという関係。

森村 まだね。

川村 というわけでもないけど。

森村 でも、やっぱりその時代に少し戻っちゃうんだ。おもしろいですね。

川村 そういう『早稲田文学』とか、『図書新聞』なんかで編集をやっていた重松清とか、藤沢周とかが編集者時代を知っているし。みんな

なそれなりに苦勞していますね。

森村 そうですね、それなりに。でも、おもしろいな。川村さんの文芸評論系の話と、韓国に行くきっかけというのは何だったんですか。

川村 韓国に行くのは、私が『群像』で出てやっていたところに、この前の岩波の文学で大澤聰と対談して、そのときに言ったんだけど、批評研究会というのをつくっていたんですよね。これは一九八〇年ぐらいかな。

森村 どんな人がいたの。

川村 基本的に私と、それから、法政出身の菊田均、あと、桂秀実の三人で基本的に始めたんですよね。月に一回、あのころは労音会館で批評を中心にお勉強会をやろうと。自主ゼミなんかの流れみたいのもので、あちこちにそういう自主講座とか、寺子屋とか、なんかで、そういう感じで批評研究会というのをやろうと。その連中がみんな『流動』という雑誌に集まっていたんですよね。

森村 ありましたね。左翼系の。

川村 ええ。あとは、宝島で『現代思想入門』とか、現代思想のチャート地図とかを作ったりした……

森村 ありましたね。ちょうどあれがブームで。

川村 韓国を読込むとか。現代思想の前ですけど。

森村 あれなんかあれでしたよね。韓国のやつだと。あれ何だっけ、忘れちゃった。

川村 だから、そのときの思想で小阪修平と笠井潔とか、マルクス葬送派といわれている人たちと、批評研究会と、いろんなグループがあちこちにあった。

森村 竹田青嗣さんなんかもいたんですか。

川村 彼も入っています。あと、現代評論、現代批評というグループがいて、これが、桂秀実とか、ねじめ正一、高橋敏夫、高野庸一たちがいて、そのあたりと何か組んずほぐれつしながらやっていった。

森村 でも、みんな世代がほぼ同じですかね。全共闘系の。

川村 それで竹田青嗣と知り合って。竹田青嗣と知り合ったのは『流動』の編集者から、竹田青嗣というのが在日の物書きがいると聞いた。『チャンソリ』という在日の若い連中がやっていた雑誌があって、そこに書いていたということで、それで金鶴泳論を書くという

ようなことで、それで『早稲田文学』に紹介して、金石範論とか李恢成論を書いて、『在日』という根拠』という一冊の本を、国文社というところから出したんですよ。私の第一評論集『異様の領域という』も国文社というところから出した。その国文社というのは、法政にいた前島哲君という法政詩人の仲間が国文社の社長の息子だったんですよ。そういう関係もあって、国文社から私の本と竹田青嗣の本が出たので、じゃ、一緒に出版記念会をやろうということで、たしか私学会館と一緒にやった覚えがありますね。

そのとき金鶴泳さんとか、柄谷さんとか、磯田光一さんとかが来てくれたという覚えがありますね。それで竹田と知り合って、竹田が韓国から友達が来ると。一緒に会ってみないかということで、新宿で会って、それは鄭大均(チョン・テギョン)なんですけれども、**彼が韓国で日本語の先生を募集しているという話を持ってきた。**それで竹田青嗣に来ないかという。

森村　そこもきつかけなんですね。

川村　ええ。そうしたら竹田が、じゃ、せっかく今売り出したし、在日で韓国語ができない俺が行ったら、みんなにいじめられるから嫌だと。そのときに私が、だったら、日本人だったら別にいじめられないからいいかと。

森村　韓国語がわからなくても。

川村　わからなくても、みんなちやほやしてくれるんじゃないかというようなので、それで行って、釜山にある東亜大学というところの日本語教師になったんですよ。

森村　あれは何年ですか。

川村　八二年でしたね。

森村　何年間？　結局。

川村　四年間。

森村　結構長くいたんですね。

川村　ええ。二年契約で、一回更新した。

森村　二年ごと。

川村　まだやってくれと。韓国に帰化しませんかとかといわれた。いや、帰化はちょっと断った。

森村 帰化はちよつと。ご家族でみんなして行つたの。

川村 ええ。だから、家内と息子二人。息子はまだ二人とも幼稚園でしたけれども。

森村 四人家族で。

川村 そこから韓国とか中国とか関係性ができたんですね。そのとき、文学の先生ということで、資格は何もないけれども、一応、群像で評論家としてなつたというのが唯一の資格というか。

森村 一応、世間的な。

川村 ええ。何にも、修士も博士ももっていないけど、学士だけでも。

森村 でも、一応日本語ができる。日本文学が。

川村 だから、そのときに、**総長に面接したんですけど、君は日本のどこ出身だと。北海道ですといつたら、ならよろしいと。関西や九州や東北だつたらだめだ**というつもりだつたんです。

森村 それは何か理由があるんですか。

川村 なまり、方言。やつぱりちゃんと標準語を教えてもらわなきゃ。なまりはないけど、余り発音とかいいほうでもないけど、そんなこと思つてもいわない（笑い）。

森村 そんなところで北海道出身が。

川村 まあ役に立つたということで。そのころはまだ韓国で日本語の学科というのが少なくて、日本人の先生というのはやつぱり少なかつたんですよ。ある意味では非常に優遇されたということもあるけれども、月給も韓国人の先生の標準にプラス十萬ウォン。

森村 高い。

川村 ええ。今の韓国だと十萬円ぐらい高い。もちろん宿舍も全部提供してくれた。

森村 向こうの。

川村 ええ。

森村 じゃ、家賃みたいなものは。

川村 ええ。そこはどんどんその後悪くなって、今、法政出身の日文にいた桜井君というのが韓国に行っているんだけど、そろそろ帰ってくるのかな。帰ってくるというのは、つまり、南ソウル大学で日本語を教えても、えらく安い給料でこき使われる。それで首を切られて帰ってくるんです。

森村 ひどいな。

川村 だから、ここ何十年かで物すごく立場が変わった。

森村 立場が逆転。

川村 お雇い外国人から不法滞在の外国人労働者みたいになった。

森村 ただの使用人みたいな。

川村 単なるもう、あいつらは来るなみたいな。

森村 そんなに。でも、当時はまだ日本人も少なく、日本語——でも、それでも、学生たちは……

川村 確かに、学生たちも日本人に初めて会ったとか、そういう状況だったですからね。行き来もほとんどしていなかったし、全斗煥の盧泰愚とか、あのころだから特に韓国が怖いというのもあって。そしてまた、経済的にもまだまだ発展途上だった。だから、そのころは子供たちがヨーグルトを食べるために、しょうがないから日本からヨーグルトをもって行って、牛乳に日本のヨーグルト菌を培養して自家製を使った。

森村 ふやして。

川村 ええ。暖房で暖めてヨーグルトをつくっていたんですね。ヨーグルトがなかったんです。

森村 わざわざ牛乳から発酵させて。

川村 ええ。ところが、菌力が弱くなって、二回、二回やると新たにまた明治ブルガリアヨーグルトを買っていかなきゃいけない。甘いのはだめだから、ちゃんとブレインのを持って行かなくちゃならない。

森村 無糖の。

川村 ええ。ところが、釜山では国際市場（クッチェシジャン）には日本製品とかアメリカ製品があったので、そこにヨーグルトとか、チョコ

コレートとか、バナナだつて高かつたんですよ。輸入が禁止されて、昔の日本と同じ。だから、夏休み、冬休みになったら日本に帰ってきて、バナナを一箱買って、近所の子供たちに配って、息子をよろしくね、仲よくしてねと。

森村 なるほどね。それなりに韓国生活があれなんだ。

川村 大変でもあったし、おもしろいところもあったし。そのときに大学の図書館に行つて、韓国語は読めないし、読むものがないから、日本の本は。今だったら本当に日本で同時的に手に入るけれど、当時は一旦日本を離れると、なかなか日本語の本なんかないわけですよ。雑誌も。それで、持っていたもので読むものがなくなると、今、慰安婦の少女の像が立っている日本領事館に行つて、図書室で本を借りてぐらいしか本がない。ところが、大学の図書館の隅のほうまで行つてみると、日本語の本があるんですよ。汚い古い日本の本。雑誌もあるんですよ。何だろうと。聞いたこともない作家の名前で、聞いたこともない作品で、でも、日本語で書いているんです。変だなと思つて、自分は一応日本文学をやっているのに、全く聞いたこともない名前というのは何なんだろうと思つたら、それは植民地時代に韓国、朝鮮人が日本の名前で書きたいわゆる親日文学、植民地文学だった。こういうものもあるんだということに初めて気がついて、そういうのを探して読むようになったのが私の植民地文学研究の始まりですね。

森村 ある種の偶然。

川村 ええ。だから、やれポストコロニアリズムとか、カルチュラル・スタディーズの影響というのは全くないんです。図書館で『静かな嵐』牧洋というのをみて、知らんなど。朝鮮で出ているから朝鮮人なんだという、大体それで検討がついて、田中英光なんかを読んでみたら、ここに出てくる人たちなんだということがあつて、それで田中英光の書いた『酔いどれ船』を読み込んで書いたのが、『酔いどれ船』の青春』。これがいわゆる植民地文学の私の最初の本ということになる。それまでは『徒然草』でデビューして、そのうちやっぱりそっちの傾向だということで、上田秋成を書いて、それから鶴屋南北を書いて、それと同時に現代物、書評とか時評とか、それはやっていたんですけども、特に植民地文学ということについて研究したわけでも、書いたわけでもないんですけども、そこから始まつて、韓国文学も少しはみてみようかなという、それはもちろんあつた。それで改めてみてみたら、満洲にもそういうのがあつた。それについて書いたのも、研究書というか評論を、尾崎秀樹さんの『旧植民地文学の研究』というのが一冊だけあつたわけですよ。だから、もちろん私が全く最初なわけじゃないけども。

森村 一応先行はいたんだけどということですよ。でも、それはそれで。

川村 それで岩波新書で『異郷の昭和文学』というのを出して、それがあ意味じゃ植民地文学を、口幅つたい言い方だけど、日本で問題を提起していた……

森村 広めたというか。

川村 文学批評の中で、それがきっかけだったというようところはありますよね。そうすると、こんなものもある、こんのもあるんだとあるいは、若い人たちは、おまえ、これみていないだろうとか出てきたけど、今はもう満洲、朝鮮だけではなく、台湾、樺太、南洋群島、東南アジア、中国まで一応手を広げたわけですよ。それが形として必然的に、単に地理的拡大で最終的に大東亜共栄圏になっちゃった。でも、それはすごいあれでしたね。偶然のなせるわざなのか必然……

川村 ただ、今のは、もうやっぱりポストコロニアリズムとか、カルチュラル・スタディーズとか、そういったものの風潮というのはやっぱりあったわけだし、ラテンアメリカ文学とか、ファンタジーとかというのでも全くそれと無関係ではなかった。だから、そういうのは自分の中でもある程度下地としてあったらどうなと思いますね。直接のきっかけはそれなんだけれども、やっぱり植民地のことをもう一度考え直してみなきゃいけないみたいな、そういう時代的風潮はありましたよね。だから、そういうのが、具体的な作品とか作家の研究というふうには結びついてはなかったけれど。

森村 実ったというか。

川村 結びついたらけれども、そういう動きは全くなかったわけじゃない。それにもう一つ、近代文学でやれる分というののもう。今さら夏目漱石、芥川龍之介、三島由紀夫、宮沢賢治ではもうどうにもならなくなっているところもあったし、何か目先を変えなきゃいけない。それからもう一つは、今度は中国、韓国から日本文学の研究者が入ってきて、彼らがやるときに、自分たちの強味というのは、日本人と同じように夏目漱石をやったり、芥川龍之介をやったって、彼らにかなわないということになる。そうなると植民地文学的な、田中英光と誰それとか、あるいは金史良とか、そういうものに目を向けざるを得なかったようなところもあるわけだ。彼らができるというか、強味というのは、もちろん韓国語、漢文、中国語が読めてという強味の中でやっていくことで、より植民地文学に傾いていくわけです。

今、韓国、中国で日本文学で博士号をとっている人たちは、みんなそれをやっています。やっている人が多いです。朴裕河さんだつて、この前、引揚げ文学論というのを出したけれども、あれも朝鮮半島からの引揚者の文学、五木寛之とか、後藤明生とか、小林勝とかそういう人たちを対象としています。日本人が気が付かなかった、やっていなかったところをうまく引き出さしてきたということがあると思う。

私もやっぱりタイミングがよかったというのが、そういう人たちがまだご存命でいたわけです。後藤明生とか、日野啓三さんとか。彼ら自身は、自分たちは今の文学者だと思っているけど、三木卓さんも含めてそういうのがあったんですね。を通してというか、引き揚げとか、いわゆる外地からの引揚者、旧植民地という、そのポストコロニアリズムという形でくるということは本人たちもできなかったし、していないし、それをうまくやれる時期でもあったんですね。だってもう今は日野さんも後藤さんもいなくなつて、ちようどそのころ八十年……

森村 半ば。

川村 ええ。一番、日野さんとか、後藤さんの仲間は旺盛に書いていたわけだし。ちようどそれが昔の、単に一九三〇年代、一九四〇年代の古い話を今さら蒸し返してやったところで、それはもう既に旧植民地文学で尾崎秀樹さんたちがあつた程度やっていたわけですね。それだけだと単なる昔のもの。

森村 昔のものを持ちだしてきて。

川村 ということになりかねないんだけど、私はそれとちようど……

森村 時代的に。

川村 ええ。やっている人たちが、それこそ先端にいたわけですよ。後藤明生、日野啓三、宮尾登美子……

森村 三木卓。

川村 ええ、三木卓さんは今も健在だけれども、それこそ毎月の文芸雑誌に書いていた。

森村 文芸雑誌にいつも小説を上げてくるわけですよ。

川村 ええ、必ず書いている人たちですからね。ただ、その中で後藤さんとか、日野さんとか、実際に知り合つて、いろいろ話を聞いた

りしたのも、それがまたフィードバックしてという。だから、私としては非常に、自分の目のつけどころの問題じゃなくて、やっぱり時代にうまく、自分もそれになっていったんだというのはありますよね。

森村 おもしろいですね。もちろん先ほどの竹田さんからのという話から始まって、韓国で。でも、それこそ、そこだけとっていくと、読むものがなくなってみたいな話になっちゃうけれども、でも、既にもうそういう文脈があった。

川村 うん、文脈がどこかにあつて。

森村 あつて、たまたまそこに……

川村 あとは水を流すだけみたいな。そういう意味では、自分としてはタイミングがよかつたんだろうなという。

森村 でも、やっぱりそういう偶然が引き起こされる必然があつたみたいな部分だ。

川村 その当時、文芸時評とか、それをやっているときに、何しろ日野さんの本を読んで論じなきゃいけないとか、後藤明生さんということから、ある意味非常に自分としても、自分が一生懸命やろうとしているところをもっと前の段階でやってくれている人たちが一番活躍していたということですよ。

森村 結局、八〇年代半ばで韓国の日本語の先生をおやめになって、戻ってくるじゃないですか。

川村 その戻ってくる契機になったのは、共同通信で文芸時評をやらなにかということと、朝日新聞で書評委員を。お金の問題ですよ。日本に帰ってきたって大学にすぐ入れるわけじゃない。だから、物書きでやっていくというのは特に批評家の場合は苦しいわけで、そのとき共同通信で文芸時評があつて、ああいうのは月給制みたいなもんですからね。

森村 毎月毎月。

川村 ええ、毎月毎月。で、朝日新聞の書評委員も。だから、二年間ずつは保証される。ざっくばらんについて、あのころ、二つ合わせりゃ月五十万ぐらいにはなる。だつたら、まあ。

森村 まあ一家四人生きていくには。

川村 ええ。ということ、ただ、それは二年きりだつたけども……

森村 更新は。

川村 共同通信は一回更新して四年間。朝日は二年間で、その間に関東学院大学に非常勤で行ったり、岡松和夫さんの紹介というか、やってくれたんだけど。そのころに、この前いった柄谷さんから法政に文化学部をつくるから、おまえを入れてやるということで、三浦雅士さんと柄谷真佐子（冥王まさ子）さんがもう決まって、学部長も決まっていたんですよ。学部長候補として、東大から来た言語の奉斗だった人が来た。

森村 言語学の。何だっけな、忘れちゃった。

川村 風間喜代三さん。

森村 そうでしたね。

川村 だから、彼は学部長候補で来たんだけど、結局つぶれちゃったから、まさか東大に戻るわけにいかないということで、それでは一般教養の言語学の先生をとということだけでも、余り偉過ぎて、本人もそうだし、学生たちもとまどった（笑い）。

森村 こんな大家でね。一般教養でしょう（笑い）。

川村 だから、晩年というか、最後のほうは風間敏夫さんも何かすごく不遇だったんじゃないかなと思うんだけど。

森村 ちょっと申しわけなかったなという。

川村 ただ、あれは、だからお兄さん、ドイツ語の、仏教の風間……

森村 何とか。

川村 彼が弟を、学部長として声をかけてくれということで、じゃ、行ってもいいよということで、法政に来て学部長になるつもりだったのに、一教の先生で終わった。

森村 言語学で。

川村 教養の言語学。

森村 学生時代も、同僚になってから後から聞いてみたいな。そんな偉い人がいたのにといい。

川村 そのときに、文化学部構想がだめになって、柄谷さんのほうも気を使ってくれて、それで駒尺喜美さんがおやめになったときに、じゃ、文学の教師を入れようということで柄谷さんが推薦してくれた。そのときに諸田さんとか吉田さんもいたから、そのときにどうい

ふうにしてくれたかわからないけど、諸田さんなんかはもちろん知らないやつじゃないからいいんじゃないかな感じではあったらしいけれども、ちょっとごり押し的な感じもあつたと後から聞いたけれども。でも、柄谷さんは何をやってごり押しだから、ごり押しではない遠慮深い柄谷さんなんか、あり得るわけない(笑)。

森村村 　ごり押し以外ない(笑)。

川村 　その前に彼が、英語の、死んじやった。

森村 　あの評論家の？

川村 　ええ。島弘之くん。

森村 　小林秀雄論ですよ。

川村 　ええ。島弘之さんが入って、だから、あれは英語で入ったわけです。

森村 　島さんのほうが川村さんより先だったんですね。

川村 　そうですね。一年か二年先。だから、柄谷さんはそのころ自分のまわりでそういうのをつくるうという気持ちはあつたけど、でも、やっぱり一教だから、そんなには。いわゆる学閥というか、グループみたいな形は。

森村 　なかつたですよ。

川村 　うん。結局できなかったですね。

森村 　でも、私なんか呼ばれたときは九五年だったですけど、その前の年に学部をつくるなんて一言もなかつたし、その前に学部がつぶれたという話は大学院生だったから東京に遊びに来て、柄谷さんと酒を飲むたびにいつていましたけどね。

川村 　だから、森村さんのときはまだつくるといふ話は決まっていなかったですね。

森村 　ないです、ないです。私が八五年に東北に行つて二年後に博士課程に入つて、それ以後毎年のようにといふか、しばらく来ては柄谷さんと酒を飲んでいたので、そのときに、要するに文化学部がつぶれたことのでんまつをいろいろしゃべつていたけれども。九五年に実際に来るようになったときは全然その話もないし、新しい学部として国際文化ができるという話もなかつたから。

川村 　あれは、だから倫理学の何とか先生の後釜ということですね。

森村 倫理学の、そうです。山村直資先生。山村のじいさんがやめるから、倫理学のポストがあくから、おまえ人事書類を出すかという。それが最初の第一声だったの。

川村 もちろん、あきがなければ、それはないから、英語、文学で、倫理学で、ただ、やっぱり、そんなにたくさんあくわけじゃないから。森村 ないから、毎年一人ずつ、五、六年。

川村 そのうち活動するのをやめる（笑い）。それはもう一教と二教は解体せざるを得ないという、これは文科省からの要請があつて、それで、これが最後のチャンスみたいなのがあつて、だから、結局やっぱり、最後のチャンスということでもないんだろうけども、ほかのところもみんな、教養部は解体しちゃった。

森村 そうですよ。なくなっちゃって。

川村 いろんな解体の仕方があつたけど。

森村 ありましたね。分属するだとか。

川村 ええ。だから、その中で、覚えているだろうけども、じゃ、私が学部新設に賛成というふうな話をたまたま私が手を挙げた。もちろんそういう話はあつただけど、余り積極的にそれをいう人はいなくて、私がついいつてしまったら、そうしるど。

森村 あの当時は誰が一教部長だったかすつかり忘れちゃったけども。

川村 渡辺さんじゃなかったかな。喜之さんじゃなかったつけ。

森村 あれは、やっぱり専門学部のほうからのあれもあつてということなんですか。自分たちでやるわけではないよね。一教自体が。

川村 もちろん解体されるということは決まったし、ほかの学部のほうで、何人かは引き受けなきゃいけないだろうけども、あんな一〇〇人もの……（笑い）。

森村 巨大な。

川村 ええ。それにまた選択権はこちら側にあるというふうになったから、やっぱり向こうの学部のほうもかなり、口では、表向きはともかくとして、何か新しいところに行つて、そちらにまとまってくれと。それがやっぱりさつきいったように、多摩移転のときの第二の解体、そのときのしこりというか、それがまだあるから、単純にみんなばあつと分かれて、そこでうまくいくというのはお互い

に考えられなかったです。

森村 考えられなかったですね。

川村 受け入れるほうも、受けるほうも、いじめられたり、あるいは無視されたり、意地悪されたりという気持ちは行くほうもあるし、受け取るほうは余計なことを、いろんなことをいうんじゃないかとかということであって、だから、あどときにいわゆるリベラルアーツセンターをつくるのかなんとかでは、山下誠さんとかが中心になって、いろいろ、縦だ横だとかなんとか。

森村 いつていましたね。Lだとかなんだとか。

川村 だから、そのときのマイナス部分がいまだに埋まっていなくて。

森村 いまだに清算されていない。

川村 あると思うけど、それでも、ある意味では前の文化学部がつぶれたことを思うと、これはチャンスであると。教養部としてそのまま生き残る道はもうないと考えたほうがいいということが始まったわけですよ。

森村 いまだに忘れないけど、教授会で結局、準備委員長を引き受けざるを得ないというかね。だって、ほかに誰がいる……

川村 あどときは山本さんだ。

森村 そうか、文明さんね。

川村 ええ。山本文明さんにいわれて、ああ、そうかということ、私は渡辺喜之さんなんかには押しつけようと思ったんだけど（笑い）。それから、後始末は前川裕さん、最後の……。

森村 最後の一教部長ね。

川村 その後は森村さんもご存じのとおり展開だけれども、ただ、学部のコネプトとして国際文化情報というふうにやったけれども、反省点はいろいろあった。結局、やっぱり情報と文化学を融合させてというのはなかなか難しいなど。

森村 難しかったですよね。というか、まだまだどうなるか、過渡期だから。

川村 余り今の段階でいってしまうとまずいけど（笑い）。ただ、やっぱり思ったほど、それこそ現実には固かった。表象と、言語と、地域研究と情報、ツールにしてというのは、いうほど簡単なことではなかった……

森村　　　　　いうほどは簡単ではない。

川村　　　　　当然のことだから。だって学生は国際文化だけど、教授はみんな国際文化とは関係なくて、専門領域を超えることはなかなか難しい。
森村　　　　　最初の一教の解体というものが、基本があるから、もう今でこそ随分、みんな、先生方おやめになっちゃったから、定年で、今名前が出た昔の人たちはみんななくなったり、亡くなっちゃったり。

川村　　　　　私がいなくなれば、そのところのことを知っている人間というのはほとんどいなくなりますよね。

森村　　　　　いなくりますよね。だから、一教の内部の話で、この準備委員会という話は、私は九五年からだからあれだけでも、この間聞いたら、リービ秀雄さんが九四年からだし、鈴木晶さんはもう少し前からいたのかな。川村さんよりも前。

川村　　　　　鈴木晶さんは前。

森村　　　　　鈴木晶さんも実質上、もう今年であれですよ。

川村　　　　　結局、国際文化で新しいという形で入れたのが司修さんと情報の……

森村　　　　　情報の大嶋さん、山本昌弘さん。

川村　　　　　それから、朝鮮語で高柳俊男さん。

森村　　　　　と、国際関係の今泉裕美子さん。

川村　　　　　それと司修さんが基本的に枠なしでというか、新しい枠で入れることができました。

森村　　　　　これ、でも、新規のメンバーとしては結構大きかったんじゃないですか。

川村　　　　　大きいけれども、でも、新しい学部を立ち上げるというのには、新規で入れる人というのはやっぱり少ないっちゃ少ないですよ。やっぱり半分ぐらいは新しい人でないと、今までのものを壊してつくるというには、結局できなかつたですよ。できないという反省というか、分野がみんな、司さんみたいに完全に芸術なら芸術という、本当いうと、かみ合いがないんですよ。だから、お互いに刺激し合っているというのは、ごく一部の中であつても、なかなかそれが考えたほどは出ないし。大嶋さんなんて、あれだけのマルチなタレントの人なんだけれども、必ずしも学部のほうで多彩な才能がうまく生かされてはいないような気がするしというのはありますよね。ただ、島田雅彦さんとかは一教では入っているけど、基本的には……

森村 国際文化ですよ。島田さんは最後の二教枠でしたっけ。最後のほうの一教。

川村 ええ、そうですね。最後に一教で入れるということ自体が、あのころは変だ、何か。……

森村 解体する母体になぜ定員がついた、新規の募集でみせるかどうか。

川村 だから、あれはそのころの変なあれで。結局、日文にいた二人と、あと経済の情報の人なんかは、今は好きなほうに行っていていいと。変といえば変なんですよ。その前に田中優子さんは社会に行つて、工学部に英語の川成洋先生たちが行つて。あれはばらばらと行つて。

森村 だから結局、本人の自由意思だからという条件で、移籍先は二〇〇三年以降。

川村 ただ、やっぱり何しろ売り手と買い手の両方の問題だから。

森村 行きたいといつても、うーんみたいな。

川村 はつきりいつて、ほかの学部に行つた人たちもやっぱりそこでは結局なじめなかったんじゃないですかね。そのままになっちゃうような感じでした。そこでちゃんと自分のやりたいこともやって云々という人は、ほとんどいないですよ。年齢的な問題もあつたし、もともと一教に残りたいという人はどうせあと二、三年なんだからとか、あと五年なんだからなんていう人もいたし。

森村 でも、基本的に、文学の片桐登さんとか、あの方たちはもう移籍しないで定年で来て、なっちゃったじゃないですか。

川村 そうですね。だから、一教と二教に何人かの人が残つていた。

森村 だから、結局は一教の解体の時期にちょうど定年とか定年延長に絡んでいた人たちは、あえてまた新規で数年残つてもというのがいたのかなという感じはちよつとみていて思いましたけどね。

川村 結局それがそのまま、余り新陳代謝できなかつたですよ。やっぱりやめたい人で、しかもまた、個人的なことだけど、国際文化で体育の先生や理系の先生を、その人たちをまた補充していくというのは。

森村 なかなかきつかったですよね。

川村 スポーツ健康科学ができてようやく。でも、今でもまだ。体育は要らないというわけじゃないけれども、学部のポリシーとしてはやっぱりほかの国際文化的な科目をもっと充実させて、語学だつて、まだまだ足りない語学もあるわけだし。やっぱり生物学とか、化学とか、物理とか、体育は別のところでやつてもらわないと専門学部としてはね。

森村 学部としては難しいですよ。

川村 だから、最初はそういう話だった。つまり、やめていたら、もちろんそのときにいた先生を、じゃ、おまえの科目はなくすからやめろなんて、そんなことはいいっこないし、するわけもないけれども、ただ、その後はもう終わりになっちゃったんですよ。

森村 だから、やめたらそれでいいのではなくて、やめて、その枠だけはまた確保されて、またそこに補充人事が入るじゃないですか。

川村 だから、これはやっぱり言語の人たちが恐れているんでしょうね。体育がなくなったら、次、ロシア語、スペイン語、フランス語、英語、ドイツ語という伝統があるから、やっぱり守りたいという。気持ちはわからないではないけど、結局、国際文化としての学問的な中心はやっぱりないんですよ。まだ英語とかフランス語では、じゃ、もうちょっと広げた形という、この前みたいにイギリス、アメリカ以外の英語とか、フランス以外とか。

森村 フランス以外のフランス語圏の、カナダであるとか。

川村 やっぱりそういうふうなことをやっていかないと。最初につくった、最初の国際文化としてのそれに合ったような形でつくり直していくということは、やっぱりそういうところから始めなきゃ、絶対できっこないわけです。今までどおりのことではなく。

森村 そこなんですよね。だから、余りあれなんだけれども、オフレコぎりぎりというか、オフレコの話が結構出ちゃうけど。

川村 だから、国際文化学部としてつくったときのそれは道半ばということは確かですよ。やっぱり理想どおりということはないにしても、じゃ、理想に一步でも近づいているかというところ、あまり近づいていない。

森村 さっきの文化と情報をつの中に入れて込むという難しさが一つ。

川村 時代もまた逆という当たり前になっちゃって、文学をやるのが、哲学をやるのが情報科学の素養なしに、やれるわけないという。

森村 そこが一つの、まだそれが形として教育の中に、日常には使っていない、何かこう、どうなんでしょうね。

川村 それが新しく何か専門分野で、本当に新しい方法論というふうにはなっていないですよ。

森村 なっていないですよ。きのう大嶋さんと、情報文化の危機というわけではないけれども、川村さんの、『異文化』の特集だから、

第一号に書いてもらったこれをもう一回読み直しながら、きのうも二人でちょっとしゃべったんだけど。もちろんここに書いてあるのはある種の理想、理念も含めてあって、ある程度、最近の映画の『シン・ゴジラ』じゃないけど、ゴジラネタと、まさか二〇

〇〇年に記事をもらったときにはそうは考えていなかったけれども、三・一の問題でわかるように原子力の平和利用が実は一番危ない武器になっているような。そういう変な符合や符牒があつて、読み直してみながら、おもしろかつたんだけど。

だけど、それと同時に、十七年前に書いてもらったこれがまだきちんとした形になっていない。言い方はちょっときついでいけれども、自分もここに十六年いて、一教からいえば二十年いるけれども、やっぱりこれからというのはどう考えるか。一応、形式的には、定年過ぎになつちやつたけど、定年でおやめになる川村元学部長が立てた作文も含めてなんだけれども、さっきの話でいうと、みんなもうおやめになつちやつたし、昔の文化学部の経緯や、それこそ柄谷さんがそこにキーパーソンとして入っていたりとか、その後、新学部をつくつた準備委員長であつた川村さんが初代学部長で、その中に何人の方が定年でおやめになつて、それこそ川村さんと、リービさんもこの間の話だと、もうそろそろ、あと一、二年だなどかといつていられるでしょう。でも、国際文化はどんどん新規に新しい方たちが来て、こういった記憶も記録も残っていないからね。

川村 まあ悪い記憶は残らないほうがいいかもしれない（笑い）。

森村 それはそうだけど、十年若いと、まだあと十年近いなきやいけないからね。いなきやいけないという言い方はよくないけど、一つの……

川村 ただ、若い人は若い人なりにいろんな動きというか、教育と研究とをうまく結びつけるようなことはやっていると思ふんですね。だから、大学院の入試とか発表をみても、皆さん、自分の範囲ということだけにはとどまらなくて、いろんなことをやろうとしている。だけど、それもやっぱり本人、個人の努力次第みたいなところがあつて、また大学院も含めて、学生たちの、はつきりいつたら、今、俺がこうやるから、おまえたちはこうやれと引つ張つていく力というのは誰にもないですよ。また、そういうのも求められていないし。一緒になつて何かをつくり上げていくという理由にしては、教師たちはちょっと昔のやり方になじみ過ぎていっているのか。こつちやつて純文学はだめになつたというときに、純文学をこつちやつていくということ、改めてそれをやつていくという、これは文学でもないんだけど、文学というのをやつていく、哲学だつてそうだけれども、そうやっていくという意味が教員、個々人の中でかなり薄くなつていと思うんだよね。悪くいつてしまうと、いい生徒が若い、特に非常勤レベルの人たち、ポストドクターになつても職がない。高学歴フリーターですよ。昔はポストドクターでも何とかかんとか食つていけるみたいな希望はないでもないけど。

森村 ないでもないけど、でも、何か意地とかね。

川村 はつきりいつてドクターさえもてば田舎の短大ぐらいならとかというのが全くなかったわけじゃないんですけど、今はむしろ逆で、田舎の短大からどうにかして脱出したいという人がごろごろしているから。そうすると、文学をやっていて危機だなんていつていられない。まずペーパー（論文）をつくって、どーんとやって、就職できるか、あるいは首を切られないか。ちょっとその辺でやらなきゃいけないというふうになっている。

森村 だって、とにかく大学院を出して、ドクターを出さなきゃいけないじゃないですか。ドクターを出したからって、もうこのご時世だから、すぐ常勤の仕事があるわけではないから。

川村 非常勤だつてないわけでしょう。

森村 非常勤だつてないですよ。だから、非常勤も何か知り合いを探すとか、それだつて限りがあるし、逆にちまたにあふれているわけだからね。

川村 そして任期つきで二年とか、二年で本当に切れちゃうわけですよ。

森村 更新がないとかね。

川村 更新がないことが前提となっている。

森村 そうですね。でも、その二年でもとにかく食いつないで、その間にまた論文を何本も書いて、発表して、エントリーして。

川村 もうそういうシステムになってしまつて、書くものの中身とか、研究の中身とか、そういうのも、はつきりいうと、もうやっていられないですよ。

森村 うちの哲学なんか、もつと悲惨だから。悲惨といつちや失礼だけれども、やっぱり論文作成マシンになるしかないじゃないですか。だから、語学だけはやれば長けてくるから、ドイツ語だ、フランス語だと新しい本が出て読んで、があつと論文を書いて発表して。

川村 でも、今ごろカント、ヘーゲルなんてやつたつてなあ。

森村 でも、また前のやつを読まないから、新しくなるでしょう。みんな現代を追いかけるから、たまに古典もぼこつとすき間ができるから。売れないんだよね。でも、本当に……

川村 法政大学出版局ですらやらない。

森村 もちろん採算があるからね。だけど、やっぱり今の若い人たちの研究環境といたらいいのかな、きついじゃないですか。

川村 だって長谷川弘さんだって全然ヘーゲル、大学にいるわけじゃないし。

森村 個人訳でね。

川村 個人訳であれだけやって、塾かなんかやって生活している。

森村 そうですね。塾をやっていましたね。

川村 ただ、今はもうそれすらできなくなっただけです。塾で飯は何とかやって、大学闘争のほうにとらわれなしに、時間をかけて自分が好きなようにやっていくというのはもう……

森村 無理ですよ。

川村 はつきりいってもう本当に無理ですよ。大学に行って、ようやく二十年も何十年もかけて、これを翻訳しましたと、でも出してくれないという。法政大学出版局ですら出してくれない。これは何で使うのか、何人買うんだよとか、一〇〇人いるかな、友達一〇〇人、読者一〇〇人できるかなと（笑い）。

森村 でも、本当に、この間は大学院の入試で中国の留学生が大量に来ましたがね。

川村 やっぱり彼ら彼女らに合わせなきゃいけないんですよ。

森村 いけなくなる。本当にそう。現実的には。だから、今いったように、純文学とか文学とか、もちろん哲学、倫理学なんていうのもう全然あれだけでも、結局来る人たちのニーズに合わせないとやっぱり。ちょっと変な話になっちゃう前に戻して、もう時間もだんだんあれになっちゃったから。そうやって川村さんの人生列伝を聞きながら、人生の流れを追っていきながら、国際文化まで、一応大学院まで来たけれども、川村さんは今後はどうしていくの？。これからは？。

川村 ただもう読んで書いて。書きたくなったら書いて、読みたくなったら読むという生活ですね。ただ、やっぱり貧乏性で、もともとたくさん書いていたから、やっぱり書きたくなるんですよ。それに、これだと思ったら、ばつと書いてしまって、飽きたら、ばつとやめちゃうんですよ。結構新しいものに目が向いてしまうというか。それに原発の事故とかいろいろあるから、やりたいことは

あるし。

森村 今一番、これからおもしろそうだなと思ってるネタみたいなのはあるんですか。ネタといっちゃ失礼か。大学院の非常勤のマスターの子たちを出すという、それぐらいの授業で、あとはご自身の研究だけけど。

川村 これからは余りアクチュアルなものとか、そういったようなものは余りやるつもりはないですね。もう世の中これだけひどくなってしまうと、今さらトランプとか、安倍晋三とか、ああいう人たちの政治や考え方につき合うつもりもないし、文学だって、今の百田尚樹とか、ああいう連中の小説を読む気もないし、時代小説も読む気もないし。ただ、最初の『徒然草』とか、そういった日本の古典に戻るといえるか、そういうのを改めて見直すという気持ちはあるけれども、そんなじじむさいことはまだ早い（笑い）。

森村 まだ六十半ばなんだからさ。

川村 本当にじじいになっちゃうと思って、またそういうふうになつてやっつけているやつに対して、あいつもじじいになつたからな、棺おけに片足両足突っ込んでいるから、古典とかなんとかやっつけていやがるというふうには。最初に『徒然草』をやろうと思ったのはそういう反発もあつたんですよ。年をとってから日本の古典なんていいたくない。

森村 そうかそうか、もとに戻るみたいな。

川村 ええ。そういうのが嫌で、やるなら若いときからちゃんとやれよというような気持ちじゃありません。だから、それは自分がそうなつたら、やっぱり日本の古典はというふうにはちよつとやりにくい。ただ、やっぱり特に文学というより思想、仏教、読経、神道なんか、平田篤胤とか宣長とか、ああいうのをやっぱりちゃんと読み直したりとか、初めて読むというのと。

森村 でも、おもしろそうですね。

川村 そういうのをやりたいですよ。時間がかかる。

森村 時間がかかるよね。でも、川村さんは、特に江戸もそうだけれども、さつきの『徒然草』まで戻れば、もうちよつと前だけれど、五巻の自撰集があるじゃないですか。あれでやっぱり最初のほうが江戸とか前のやつ、古典文学系のことをやっているじゃないですか。その素養があるし、それこそこの間の超訳の『歎異抄』もあるしね。だから、古文系とか漢文系に関してはまだ造詣が深いから。

川村 別に深くないですよ。ずっとやっつけているから、ある程度はできるけど、全然専門的なものではないし。ただ、やっぱりそのあたり

は改めてやりたい。また日本の古典ってたくさんあるんですよ。全然問題にされないようなものもあって、そういうのをむしろ本にしたり、復刻したりということも含めて、そういうのもおもしろいなというふうに思う。

森村 単純な日本回帰みたいな、年寄りのやってしまうといっちゃ失礼だけれども、もはや気づいたとき日本だったみたいな話ではなくて、新しいところとしての日本みたいなのを、古典みたいな。

川村 そういうのはやりたいし、やるつもりですけどね。

森村 柄谷さんみたいなやつは、相変わらずといっちゃ失礼だけれども、怒られちゃうけど、マルクスとカントとね。

川村 一生懸命ぐるぐる回っているけど。

森村 一生懸命ぐるぐる回ってやってるので、当分日本には帰ってこないからね。頭の中が。

川村 この前、高井有一さんが亡くなったときに追悼会へ行つて、高井さんが書いたという文章のことが話題になった。これは小説の場合だけれど、六十を過ぎたらもう新しいものは何も書けないというのが後藤明生とかそれで、坂上弘とか、高井さんの中で論議になったという話を追悼会でやったけれども、何か身に染みて感じられるようになって（笑い）。俺もちょっと新しいことをやっているつもりだけれどなど。けれど、最近は何か考えるたびに、六十を過ぎたらもう新しいことはと。でも、そうすると、今までやってきたことの蒸し返しというか、それを掘り返してという手もないことはないなと思うけれども、でも、それだとやっぱりおもしろくないですよ。昔と同じことをやってても、もう一回書けば何か発見できるかもしれないとか、それこそ今までやってきたものを全部掘り返すことは幾らでも可能だけれども、はつきりいつて、それよりも新しいことをやって。それはやっぱり年をとると、気持ちはあるけれども、足が動かない。気持ちは前のめりになっているけど、足も手も動かないということもあり得るから。実は気持ちはばかりあって、頭が動いていないというのは吉本隆明の晩年ですね。でも、その晩年ですばつと、これはだめだといって死んでいったのが江藤淳だから、やっぱりそういう人たちをみると、江藤淳の道は選べないし、吉本さんもちよつとみつとも悪いなど。

森村 そうすると、もう新しいスタイルをつくっていくしかなない。

川村 柄谷スタイルは少し難しい。

森村 性質、性格的に難しい（笑い）。

川村 だから、自分なりの方法でするしかない。余り前のめりになってやっていくのは。

森村 もういいんじゃないかという。だったら、やっぱり新しい、それこそ川村スタイルが、批評のあり方も含めて。

川村 そうしたほうがいいかな。

森村 そろそろ、五時になっちゃったから。長い間、どうもありがとうございました。

川村 まとまるかな。

森村 まとまるかどうかわからないけど、一応初稿が出たら、好きに調整して、書き加えたり、削ったり、足したりしてください。どうもお疲れさまでした。

(二〇一七年一月三十一日・国際文化学部長室にて)